

---

 短 報
 

---

 九州，玄界灘烏帽子島におけるカンムリウミスズメ *Synthliboramphus wumizusume*  
 の繁殖地の再発見

 永田尚志<sup>1</sup>・大長光純<sup>2</sup>

## はじめに

カンムリウミスズメ *Synthliboramphus wumizusume* は日本近海の暖海域にだけ生息するウミスズメ科の小型の海鳥であり、1975年に種指定に天然記念物に指定されている。玄界灘では、筑前沖ノ島属島の小屋島、柱島、大机島、小机島で繁殖することが報告されている（環境庁 1975, 1978, 北九州野鳥の会研究部 1978, 樋口 1979）。しかし、小屋島では1987年の繁殖期に島に侵入したドブネズミにより推定360羽のカンムリウミスズメと410羽のヒメクロウミツバメ *Oceanodroma monorhis* が殺され、両種の小屋島の繁殖個体群は大打撃を受けたと報告されている（武石 1987, 土肥・武石 1987）。福岡県によるドブネズミ駆除後に1988年から毎年小屋島で行なわれている継続調査の結果、カンムリウミスズメの個体数は30羽程度、ヒメクロウミツバメの個体数は60羽程度と推定されている（池田浩一 私信）。大机島と小机島においては1970年以降、カンムリウミスズメの繁殖は確認されておらず（環境庁 1978）、ドブネズミが生息している現在では繁殖は不可能である（永田尚志 未発表）。黒田（1923）は唐津沖の烏帽子島において数10羽のウミスズメ *S. antiquus* が繁殖していることを報告している。分布域から判断してカンムリウミスズメの可能性があり、減少しつつある玄界灘のカンムリウミスズメとヒメクロウミツバメの保護を考えるには繁殖地の分布を把握することが必要である。

このような状況の中で、烏帽子島における両種の繁殖状況の調査が計画された。本報では、烏帽子島で確認された種の繁殖状況について報告する。烏帽子島は糸島半島と老岐島の間、東経129度59分、北緯33度40分に位置する周囲約800m、海拔42mの小さな岩礁島で、島の中央に無人灯台がある（図1, 2）。植生は岩場にヒゲスゲ、ニオウヤブマオ、タイトゴメ、オニヤブソテツ、ソナレムグラ、野生化したウチワサボテンなどの草本類がまばらに分布し、樹木は生えていない。調査は、カンムリウミスズメの繁殖末期にあたる1990年4月21～22日と、ヒメクロウミツバメの繁殖前期にあたる1990年7月21～22日の2回に分けて行なった。

## 結果

## 1. カンムリウミスズメの繁殖状況

灯台に登るためにつくられた道の石垣および灯台の礎の石垣の隙間にカンムリウミスズメが営巣し

---

 1991年10月15日受理

1. 九州大学理学部生物学教室。〒812 福岡市東区箱崎 6-10-1

現所属：環境庁国立環境研究所野生生物保全研究チーム。〒305 茨城県つくば市小野川 16-2

2. 福岡県林業試験場。〒834-12 福岡県八女郡黒木町今 1314-1

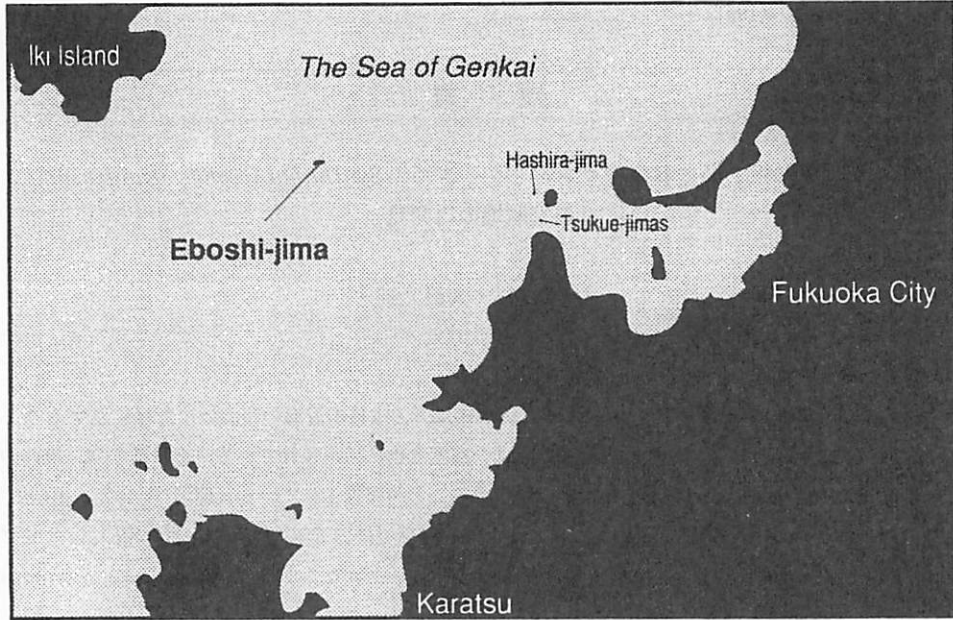


図1. 調査地の位置.

Fig. 1. The location of Eboshi-jima Island.

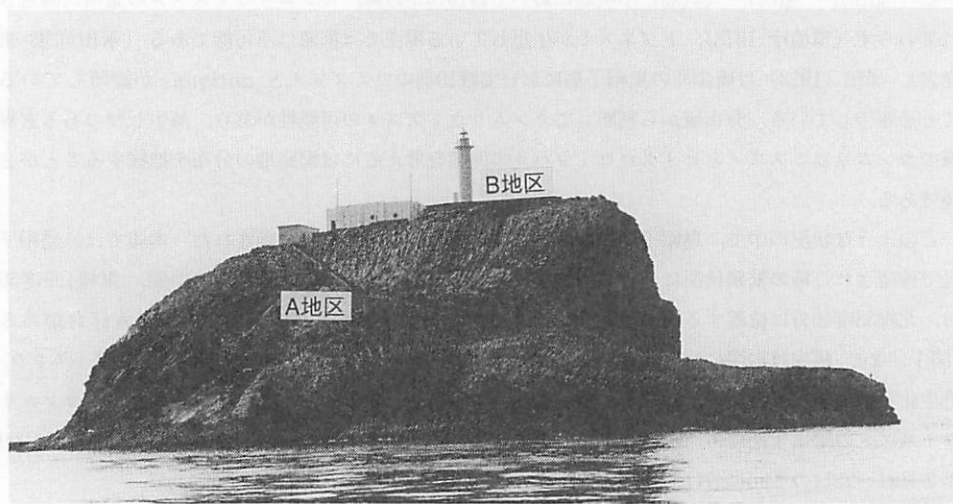


図2. 烏帽子島概観. 南斜面ではA地区とB地区の石垣にカンムリウミスズメが営巣.

Fig. 2. Eboshi-jima Island, showing the breeding sites A and B.

ているのを確認し、4月21日夜に6羽の成鳥を捕獲した。6羽の性別は不明で、各部の計測値は翼長 $125.4 \pm 1.7$ mm, 尾長 $37.3 \pm 2.6$ mm, 嘴峰長 $28.4 \pm 1.3$ mm, ふ趾長 $15.5 \pm 0.3$ mm (すべて平均 $\pm$ 標準偏差,  $N=6$ ), 体重 $181.3$ g (範囲:  $144 \sim 203$ g,  $N=6$ )であった。4月22日に石垣の隙間を丹念に調査した結果、11巣を発見した。そのうち2巣では抱卵中であり、5巣で卵を、3巣で成鳥の出入りを確認し、残りの1巣ではふ化後の卵殻を確認した。一腹卵数は、卵の確認できた8巣のうち7巣で2卵、1巣で1卵だった。7月22日の調査では、新たに、ふ化しなかった卵のある3巣が発見され、

最終的には合計14巣が確認された。カムリウミスズメの営巣していた石垣の面積は、登山道沿い南面で55m<sup>2</sup> (図2のA地区, およそ20m×2.5m), 灯台下北面35m<sup>2</sup>, 同南面25m<sup>2</sup> (図2のB地区) の合計115m<sup>2</sup>であった。A地区の石垣の営巣密度は0.22巣/m<sup>2</sup>であった。

## 2. その他の種の繁殖状況

烏帽子島ではヒメクロウミツバメの繁殖の痕跡および声は確認できず、本種は繁殖していないと判断された。カムリウミスズメが営巣した同じ石垣では、アマツバメ *Apus pacificus* も営巣した。4月21～22日の調査時点では、まだ造巢中であり完成した巣の数は少なく、産卵された巣は確認されなかった。巣は石垣の隙間の水平または少しくぼんだ岩上に、枯れ草や砂を粘液で固めて産座をつくった簡単なものであった。7月21～22日の調査では、石垣に51巣が確認され、そのうち36巣で巣立ち直前のヒナが確認された。ヒナが産座を離れて石垣の隙間に張りついていた巣を除き、ヒナの数をも特定できた15巣における一腹ヒナ数は $1.4 \pm 0.49$ 羽であった。A地区の石垣での営巣密度は1.8巣/m<sup>2</sup>であった。巣立ち直後と思われる多くの幼鳥も飛びまわっていたので、ヒナのいない巣はすでに巣立ったものだと考えられた。また、7月21日上陸時に巣立ちヒナに給餌しているイソヒヨドリ *Monticola solitarius* を確認した。

## 考察

黒田 (1923) が報告した烏帽子島の繁殖個体群は、おそらくウミスズメでなくカムリウミスズメであったと考えられる。カムリウミスズメが烏帽子島の北側斜面に分布しているヒゲスゲ下の岩の割れ目で繁殖している可能性は少なく、営巣場所は数か所の石垣に限られていると考えられる。営巣可能な石垣の面積 (約120m<sup>2</sup>) と日没直後および夜明け前の鳴き声から判断して、最大30つが程度のカムリウミスズメが営巣しているものと推定される。今回の報告はカムリウミスズメが石垣という人工物を利用して繁殖したはじめての例であるが、樋口 (1979) の整理した岩石の亀裂や石の隙間を利用する営巣タイプにあてはまると考えられる。また、同じ石垣にアマツバメも営巣していたが、アマツバメはカムリウミスズメが入れない狭い隙間を利用しているのと、繁殖時期がずれているため、営巣場所をめぐる直接的な競争はないと考えられる。

ヒメクロウミツバメが繁殖していない原因として、アマツバメとの営巣場所をめぐる競争がある可能性が考えられるが、断定はできない。烏帽子島のカムリウミスズメは小屋島と異なり、石垣を利用して営巣しているため、隙間をあけて石垣を積み営巣環境を整備すれば、繁殖個体数を増加させることも可能であろう。

今回、玄界灘においてカムリウミスズメの新繁殖地を再発見したことにより、玄界灘の個体群の絶滅の危惧は少し減ったが、個体群崩壊前の繁殖個体数から考えて、小屋島が玄界灘のカムリウミスズメの中心個体群であったのはまちがいない。最近、さかんになった釣りブームの影響で海鳥の聖域に人が上陸することにより、繁殖地にドブネズミなどの捕食者が侵入する機会が増加し、第2、第3の小屋島が出現する可能性は高い。繁殖地への上陸の規制など、なんらかの措置が必要であろう。

## 謝 辞

本調査は、日本野鳥の会福岡支部の援助により行なわれた。烏帽子島での調査を手伝っていただいた福岡支部の長井節夫、冨永誠、岡部海都、増田智久、谷口弘泰、宮原俊彦の各氏、天然記念物現状変更の便宜をはかっていただいた文化庁記念物課の池田啓博士、カムリウミスズメの資料を提供していただいた福岡県林業試験場の池田浩一氏、文献を教えていただいた東邦大学の長谷川博助教授、

北九州市自然史博物館の武石全慈氏に厚くお礼申し上げます。

#### 引用文献

- 土肥昭夫・武石全慈. 1987. 筑前沖ノ島属島, 小屋島のカムリウミスズメが大量死した原因および対策のための調査報告(第一次現地調査報告). 福岡県緑化推進課, 福岡. 22pp.
- 樋口行雄. 1979. カムリウミスズメの繁殖生態と分布. 海洋と生物 3 : 20-24.
- 環境庁. 1975. 沖ノ島. 特定鳥類等調査報告書, pp. 225-268. 環境庁, 東京.
- 環境庁. 1978. 柱島, 大机島, 小机島. 特定鳥類等調査報告書, pp. 132-139. 環境庁, 東京.
- 北九州野鳥の会研究部. 1978. 筑前沖ノ島付属島小屋島のカムリウミスズメ・ヒメクロウミツバメ繁殖地における人為的被害に関する実態調査 その3まとめ. 北九州野鳥の会, 北九州. 37pp.
- 黒田長禮. 1923. 朝鮮黄海道西島の鳥類. 鳥 3 : 309-314.
- 武石全慈. 1987. 福岡県小屋島におけるカムリウミスズメの大量斃死について. 北九州市自然史博物館報告 7 : 121-131.

Rediscovery of a breeding population of the Japanese Murrelet  
*Synthliboramphus wumizusume* on Eboshi-jima Island  
in the Sea of Genkai, Kyushu

Hisashi Nagata<sup>1</sup> and Jun Onagamitsu<sup>2</sup>

We rediscovered a breeding population of Japanese Murrelets *Synthliboramphus wumizusume* on Eboshi-jima Island (33°40'N, 129°59'E), where Kuroda (1923) had described the presence of a breeding population of Ancient Murrelet *S. antiquus* in the Sea of Genkai. Fourteen nests were found and clutches were completed in eight of the nests. Clutch size was two in seven nests and one in the other nest. Japanese Murrelets laid eggs and incubated in the gaps of an artificial stone wall. The breeding density of murrelets was 0.22 pairs/m<sup>2</sup> in the wall. Judging from the breeding density and the total area of available walls, the estimated population size was less than sixty birds there. Eboshi-jima Island should be registered as the breeding site of Japanese Murrelets rather than Ancient Murrelets.

1. Department of Biology, Faculty of Science, Kyushu University. Hakozaki 6-10-1, Higashi-ku, Fukuoka 812  
Present address : Laboratory of Wildlife Conservation, National Institute for Environmental Studies. Onogawa 16-2, Tsukuba, Ibaraki 305
2. Fukuoka-ken Forest Experiment Station. Ima 1314-1, Kurogi-machi, Yame-gun, Fukuoka 834-12